

煙草とわたくし

川上 宏

煙草とのかかわりかたについて、次の三つの場合が考えられる。

① 一生煙草に無縁

② 喫煙者

③ 喫煙者だったが途中禁煙を實行し、非喫煙者になった。

私は人生のそれぞれ三分の一ずつを、非喫煙者、喫煙者、禁煙実行者として六十数年生きてきた。結果、非喫煙者にも喫煙者にも味わうことができない貴重な体験をすることができた。

学生時代、新橋でバイトを始めた。ちよつと危ない会社だったが、歩合制で、一般のバイトより二倍は稼げてしかも日払いだった。国鉄新橋駅前には新装開店の花輪を飾りたてたパチンコ店がずらりと並び、サラリーマンたちの射幸心を煽っていた。始めは暇つぶしのつもりで立ち寄って、適当に遊んで帰ったが、ある日、幸運の女神が微笑んだのか、ハイライトの二十個入りカートンを、両方の



手で抱えきれないほど大勝して帰路についたのであった。

勝利の快感が忘れられず、翌日からはバイトが終わると日銭の千円札を握りしめ、一目散にパチンコ店に向かうようになった。たまに勝利することもあったが、大半は大負け、あげくは電車賃の小銭だけ残し、スッカカラカソになって帰宅することもあった。千円札の紙幣という感覚はなくなりパチンコ玉のドル箱の重さが私の幸福のバロメータにすべてになっていました。合宿費用捻出のため始めたバイト、しかし終わってみたら手元に残ったのはハイライト数カートンと現金数百円だけだったという、煙にまつわる青春の思い出である。

一日のうちで、どのような時がいちばん旨いかというと、食後の一服につきる。和食より、中華・洋食のあとの一服。野菜・果物をとると煙草の味が変わるので一切口にしなくなつた。いわゆるグルメのお店に入っても、旨い料理なんかどうでもよく、食後の一服の

方が楽しみだった。本末転倒だ。

相性のいい飲み物は濃いめのコーヒー。より旨い煙草を吸いたくて一日三回はコーヒー店に立ち寄るのが日課になった。寝起きの一服も忘れられない。すきつ腹でいきなり吸うと頭がクラクラ、意識が一瞬だが遠のき、これがまたサイコーなのだった。

一日六十本は吸う、煙草依存症の私でしたが、漠然といつかはやめようと思っただけで、近親者にヘビースモーカーが沢山おり、肺癌で命を落とした人も多かった。南千住のおじさんは、いつも缶ピースを持ち歩いていて、笑うと、腐ったトウモロコシのような茶色い歯がぶ厚い唇のあいだから見え隠れしたのをはつきり覚えていて。そのおじさんも還暦を待たずに、癌で亡くなりました。

四十歳を過ぎたころわが家で小さな事件が起きた。

小学生になった長女がトイレの中で喘息の発作を起こした。原因はトイレで吸った私の煙草だった。長女は生まれつき呼吸器系が弱く、低気圧が近づいたらだけで喘息を起こすほどデリケートだった。妻からは「子供を殺

すつもり？」と激しく叱責された。そして長女は怯えた目で私をみるようになっていた。

それまでも何度となく禁煙にチャレンジしたがすべて失敗に終わっている。一日、ふつかはなんとか持ちこたえるが、三日目には頭の中はまっ白、口の中の異常な違和感に耐えられず、エーイままよとばかり禁をやぶってしまうのです。

今まで何回も失敗したのはいきなり禁煙をしたからで、そこに無理があった。まず本数を減らして、最後の最後に煙草をたてばいい。そこで二十本入りのハイライトを十本入りのホープに切り替えることにした。一日十本への挑戦。ホープに「希望」を託した。ただ、油断すると昼前には空になってしまふ。そこで一日のうちに十回の喫煙タイムを設け、計画喫煙をすることにした。

- 一回目：朝食のあと
- 二回目：出社後
- 三回目：十時
- 四回目：昼食後
- 五回目：三時
- 六回目：退社前
- 七回目：帰宅後
- 八回目：夕飯後
- 九回目：就寝前
- 十回目：予備

オーバーしたり余ったりしたときは繰越扱いにして帳尻を合わせた。喫煙の誘惑から身を守るため、コーヒー店や居酒屋にはできるだけ近づかないようにした。

一九九七年十二月三日、一年間の準備期間を経て完全禁煙（禁煙に完全も不完全もない（笑）に踏みきった。この日は四十六回目の誕生日でもあった。禁煙して三日目になると案の定、口の中は言いようのない不快感に襲われた。頭の中は真っ白、思考は完全停止。「ここはどこ？わたしは誰？」。ニコチンの禁断症状は、体験したものには分からない、ある種の飢餓状態に違いない。そこいら中を徘徊したりヨガの真似事もしました。ガムや飴、ハッカ、仁丹、梅干しあらゆるものにすがすがしく、どれも効果は期待できなかった。

当時禁煙パイポという禁煙グッズがあった、これは口寂しさを紛らわせるには相当の効果があった。小指を立てたオヤジが「私はこれで会社をやめました」というテレビCMがありました。それからは片時も禁煙パイポを離せなくなった。ストレスからプラスチックの吸い口を思いつき噛むため、最後はぐしゃぐしゃになってポイされた。

自己との壮絶な戦いの日々が続いたが、二

コチンが体内から少しづつ排出されていたのか、三週間を過ぎた頃には、多少気分が落ち着いてきた。この勢いによつて、禁煙の道を修行僧のように黙々と歩き続けた。時おり「一本だけ吸ってみたら？誰も見てないわ」という悪魔の囁きが何度も聞こえたが、両手でしっかりと耳をふさぎ、なんとか難局を乗り越えた。

禁煙を始めて暫くの間、煙草を吸っている人を見かけると、スーッとそばに近づいていて、まわりに漂う煙（副流煙）を思いつきり吸い込むようなはしたないことを何度も行なった。「おおこの馥郁とした紫煙よ！」相手に気づかれ、なんだこいつと睨まれることしばしばであった。

禁煙後、最初に変化に気がつくのは、飯の旨さだ。銘柄を変えた訳でもないのに、甘味が強く感じられ、香りに感激する。お新香と味噌汁があれば何杯でもいける。この年、半年で体重が十キログラムもアップした。

砂漠をひとり、とぼとぼと歩いていると、煙草の自動販売機がある。しめしめとコインを投入するが、商品が出てこない。続けて何

枚も投入口に入れるが全くの無反応。「オーイ、ねえさん！十五番出ないよ」まるで昔のパチンコ台。ゆすったり身体ごとぶつかったり、蹴とばしたりしているところで家人に起こされる。「どうしたの？うなされてたわよ……」。身体じゅう汗びっしょりで喉はカラカラです。

煙草を吸う夢を今でも見る。夢にもかかわらずしっかりと味がして実に旨い。「しまった、禁を犯した！」懺悔しながらも、得をした気分が目覚める。

『禁煙の愉しみ』というエッセーが一九九八年八月に出版された。著者は山村修氏、一九五〇年生まれで私とひとつ違い。書評家として（「狐」名義で）知る人ぞ知る人なのだが皮肉にも肺癌を患い、惜しくも五十六歳の若さで亡くなった。

喫煙者時代はスイート&マイルド、甘く香しく至福の時を演出する煙草だったが、今そばで吸われると、はっきりいって臭い。例えれば、糞尿にまみれた腐った藁束を燃やしていえば、また捨て置かれた古い肥溜めのおい。二十数年の間に私の身体に変化を生じ

た結果だろうが、人間の知覚、感覚っていったい何だろうと思ひめぐらす。いい加減というか、曖昧というか、同じ刺激にも甘受する方の都合で、心地良くなったり不快に感じたり。喫煙者、非喫煙者ふたつの立場を経験したこととおおげさにいえば、一身にして二生を生きたような気がします。

最後にひとこと、喫煙者の方々がこの駄文を読んで気分を害されたらゴメンナサイ。声高に嫌煙権を主張する気はありませんし、喫煙者を非難、弾劾するつもりもありません。どうか指定された喫煙コーナーで、紫煙を心ゆくまでご堪能ください。



イラスト (C) 草野 義彦